

1. 検討部会・アンケート実施日

- ① 第1回川崎市文化芸術振興会議市民ミュージアムあり方検討部会（令和2年7月28日）
市民ミュージアムのこれまでのあゆみについての共通認識を確認。現地視察を実施し、課題点を整理。
- ② 第2回川崎市文化芸術振興会議市民ミュージアムあり方検討部会（令和2年9月29日）
現地視察を受けた意見交換を実施。また、市民ミュージアムのこれまでの活動の成果と課題について議論。
- ③ 第3回川崎市文化芸術振興会議市民ミュージアムあり方検討部会（令和2年11月16日）
アンケート結果を踏まえ今後の事業等の考え方を議論。1・2回の議論を受け等々力緑地内での再開館は断念。
- ④ 川崎市市民ミュージアムに関する市民アンケート（令和2年9月18日～令和2年10月9日）
川崎市在住の満18歳以上の方から3500人を無作為に抽出し、市民の意識やニーズを多面的に明らかにすることを目的とした市民アンケートを実施。（別途、市立の中学校及び高等学校、市内の障がい者施設にも調査協力を依頼。） ※以下、「市民ア」と記載。

2. 主なご意見-1

(1) 博物館の考え方

■ 基本的な考え方（使命）

- 人々の暮らしと水との関わりというのは、市民ミュージアムでも取り上げてきたことだと思うので、そこをさらに強化していくのが重要な点だと思う。
- 特に今回、市民ミュージアムのテーマで考えると、地元の川崎の産業を考えると、例えば、京浜工業地帯が大変重要で、やはり川崎の産業のアイデンティティの一つだと思う。
- 川崎ならではの歴史や風土や生活の中から抽出された地域性というものが上位概念になり、それが各議論の専門性を統合することになる。

■ 事業の考え方

- 産業史や平成史のトピックについても、そういったものをどう整理していくかが今後重要になってくる。
- （多摩川・産業）の2つのエコミュージアム活動は川崎市の資源で活かせる方法を考えたらよいのではないか。
- 多摩川エコミュージアムと当然関わる可能性は出てくると思う。川をテーマにするのは重要になるし、今までそういうものを大事にしてきた取組みとの連携強化がさらに重要になってくる。
- 博物館の収集すべきものは「川崎市の近・現代」が最も多い（48.5%）。「有名な文化財・資料」が7選択肢中5番目（29.4%）。（市民ア）
- 博物館での展示については「川崎市ゆかりの文化財や資料の展示」が最も多い（44.6%）。次に「体験型展示」が多い（42.3%）。その次に「話題性のある展示」が多い（40.4%）。その次に「体感型展示」（38.3%）と「博物館・美術館連動展示」が多い（35.3%）（市民ア）
- 博物館の活動については「子ども向けプログラム」が最も多い（44.9%）。次に「川崎市の歴史・文化・民俗の調査研究」が多い（37.8%）。その次に「企業連携」が多い（36.6%）。（市民ア）

(2) 美術館の考え方

■ 基本的な考え方（使命）

※美術館単独についての御意見は特になし。

■ 事業の考え方

- アーティストたちに定期的に通ってもらって、それで美術館と市民の方々との間を結び付けていくようなモデルがミュージアムにも適用される必要がある。
- 現在の美術の大きな動向としては人類学との接点で新しい考え、専門性を模索しようという所謂人類学的展開と呼ばれる傾向が非常に強くて、そういう場合、実は博物館と美術館が共存していった方がはるかに有利。
- 川崎のことをよく知っている、それもアーティストでなければ見つからないような視点で川崎のことをよく体感しているアーティストたちに定期的に通ってもらって、それで美術館と市民の方々との間をキュレーターやエデュケーターの力を借りながら結びつけていくようなモデルが、芸術祭ではないけれどもミュージアムにも適用される必要があり、そういうことを通じて新しい領域というものを広げていけるのではないかと思う。
- 美術館の収集すべきもので「絵画・彫刻・陶芸」が最も多い（49.0%）。「川崎市ゆかりの作家や作品」が他の選択肢に比べ多い（39.7%）。「写真」・「漫画」・「映画」・「映像」が横並び（30%前後）。（特に若い世代で写真・漫画が多い）（市民ア）
- 美術館での展示については「有名な作家や作品」が他の選択肢に比べやや多い（43.3%）。「川崎市ゆかりの作家や作品」が他の選択肢に比べやや多い（42.2%）。若い層で「新進気鋭の作家」、「歴史とアート作品の融合」が多い。（市民ア）
- 美術館の活動については「子供向けプログラム」が最も多い（42.2%）。次に「市民向けプログラム」が多い（34.2%）。その次に「川崎市ゆかりの作家等の研究」が多い（33.9%）。その次に「学校での地域サポート」が多い（32.2%）。（市民ア）

2. 主なご意見-2

(3) 施設の考え方

- ・公園や緑豊かな広い場所で半日過ごせる等のニーズが求められている。
- ・もう少しアクセスの良い場所にあることによって、目的のない人たちもふらっと立ち寄れるような居場所と展示が両立する可能性があるのではないか。
- ・市民参加とか地域連携、学校連携とかいう意味を考えていくと、アクセスが極めて重要。
- ・移転できるとしたら、今の場所ではなくて市民の使い勝手の良い場所、アクセスしやすい場所がよいと思う。
- ・公園や緑豊かな広い場所で、来ることによってそこで半日過ごせるとか、そういうニーズが求められている気がする。
- ・アクセスがしやすくていろいろな活動が出来るようなスペースと機能と、そして被災しないという条件が浮かび上がってきた。
- ・人の活動のための場所を合わせて作っていくのがよい。
- ・収蔵庫を分散し、ミュージアムそのものはそれをコントロールする中枢機能を持つという方向にシフトしていくべき。
- ・建築物としての意味をヘリテージとして考えていただくということは意味があること。
- ・災害遺構みたいな形で積極的に被災したことを後に残すようなことは、これから別の角度で考える必要があると思う。
- ・求める設備については「心地よくリラックスできるスペース」が最も多い(53.7%)。次に「緑豊かで解放感のある環境」が多い(51.8%)。その次に「カフェ・レストラン・ショップ」が多い(47.1%)。(市民ア)

(4) 全体の考え方

- ・「都市と人間」のビジョンは大事である。
- ・おそらく方向性としてはこういったこれまでのミュージアムの役割というものを全面的に書き換えるようなことはなく、この方向性で修正を加えていくことになるのだろうと思う。
- ・地域性をどう捉えるかということが今後の市民ミュージアムを考える上で重要な点かと思う。
- ・地域をまとめて総合して川崎というものをテーマにしていくミュージアム。
- ・都市川崎の現在と今後の川崎を考えることのできるミュージアム。
- ・地域をつなぐハブとしてのミュージアム。
- ・地域性、ローカリティーというものを構成する大きな要素として、具体的な歴史を持った産業、2つ目は自然、3つ目に生活がある。
- ・総合性や専門性を乗り越えたトータルな視点を持ったミュージアムの方がむしろ求められている。
- ・ミッションや、9つの分野の問い直しが必要では。9つの分野というのは通常の博物館ではあまりない。それがミュージアムの経緯でそれぞれの分野を複合化してしまったからこういう形になってしまっている。やはり、9つの分野というのがネックになっていると思う。
- ・専門性を乗り越えたトータルな視点を持ったミュージアムの方がむしろ求められており、川崎がかつて作ったモデルというものは、実は将来性がある。
- ・都市型のミュージアムとして東京にもない横浜にもないあるいは大阪にもないような、都市と市民が共同していくような博物館を思考していくことが一つの考え方としてはあると思う。
- ・川崎市内には地域ごとにいろいろな活動とか資源もあり、提供すべき様々な内容が地域に応じてあるので活用すべき。
- ・シビックプライドや市民の方達の誇りという言葉が、これまでも当然出ていると思うが、これから先も出てきてほしい。
- ・社会的弱者にもどれだけ目配りできるかが、こういった博物館・美術館にするかを考えるにも、そういったところにちゃんと射程を置いていかないといけない時代になったのではと思う。
- ・復興とか復旧の過程そのものを積極的に見せていくことが重要。
- ・今後気候変動等で美術館の被災が必ずしも例外でなくなる可能性が非常に高いので、防災と芸術作品、そういうことを啓発するような施設も今後考えられないか。
- ・今回の浸水被害をやっばり何らかの形で活かさないといけないと思う。
- ・災害をテーマにして再出発する形でやっていくのは重要なことだと思う。
- ・コンテンツを連携するという所と、様々な活動をする市民団体との協働、ネットワークの方法論みたいなところも見えてきた。
- ・強みの部分で、市民連携が非常に強いと思う。特に学校連携。

(5) その他

- ・いろいろな情報をストーリーミング、Youtubeなどの配信で継続的に出していくスタジオ機能も求められるのではないか。
- ・組織体制作りも同時に考えて欲しい。

1. ヒアリング先・実施日

- ① 川崎市市民ミュージアム学芸員（令和2年8月20日）
各部門と教育普及、保存修復の専任担当者にこれまでの運営内容と課題をヒアリング
- ② 川崎市市民ミュージアム副館長（令和2年8月26日）
佐藤副館長（学芸部門長）にこれまでの運営内容と課題をヒアリング
- ③ 川崎市市民ミュージアム館長（令和2年11月25日）
大野館長に今後の市民ミュージアムのあり方に関する意見をヒアリング
- ④ 川崎市市民ミュージアムボランティア（令和2年12月12日）
市民ミュージアムボランティア7名にこれまでに不便だった点や立地についてヒアリング
- ⑤ 川崎市総合文化団体連絡会理事会（令和2年12月17日）
川崎市総合文化団体連絡会理事に市民ミュージアムに求める機能について調査票を配布

2. 主なご意見

（1）博物館の考え方

- 基本的な考え方（使命）
- 事業の考え方
- ※博物館単独についての御意見は特になし。

（2）美術館の考え方

- 基本的な考え方（使命）
- 事業の考え方
- ※美術館単独についての御意見は特になし。

（3）施設の考え方

①～③ 市民ミュージアム関係者からのご意見

- 立地条件
 - ・ 駅に近く、アクセスの利便性が高いとよい。
 - ・ サードプレイスのような、目的がなくても気軽に使っていただける形がよい。
 - ・ 周辺エリアと一体で地域経済を盛り上げていけるような形が望ましい。
- 建物の形態や諸室
 - ・ 現状の施設規模は大き過ぎると感じる。
 - ・ 展示の動線が作りづらい、湾曲壁面への展示がしづらい。
 - ・ 現在の立地を考えると映像ホール席数は多過ぎると感じる。
 - ・ 収蔵庫に対して資料の数が多過ぎた。収蔵庫の規模としては国立・県立並みで十分な広さであった。
 - ・ 図書や映像資料の利用を、誰でも簡単にできる形がよい。
 - ・ 美術部門についても常設展示がほしい。
 - ・ 歴史博物館／美術館／映像センターが独立して集まっているようなコンプレックス型の施設としてはどうか。

④ ミュージアムボランティアからのご意見

- 立地条件
 - ・ 多摩川、鶴見川流域には建設できないだろう。少なくとも中原区以北だと思う。
 - ・ ハザード上、危険と言われる場所への立地はやめてほしい。
 - ・ 交通の便は重要。駅から歩けるアクセスの良さがほしい。
- 建物の形態や諸室
 - ・ 財政的に新築が厳しければ、既存施設の活用や、図書館等との複合施設にしてはどうか。
 - ・ 障害者にもっと配慮したバリアフリーな施設してほしい。
 - ・ 展示内容をもっと自由に換えられるようにした方がよい。

（4）全体の考え方

①～③ 市民ミュージアム関係者からのご意見

- ・ 「都市と人間」のテーマは設定当時から時代が変わった。現代の視点からの見直しが必要。
- ・ 「都市と人間」のテーマは、美術部門・博物館部門の合同企画展を考える際には役立った。
- ・ 「都市と人間」のテーマが個別の収集計画に反映されていなかったことは課題。市として収集方針やテーマをはっきりさせてほしい。
- ・ 博物館部門・美術部門は分かれている方がわかりやすく専門性が高められるが、時々融合の試みをしてほしいと思う。
- ・ テーマに合わせて分野が集まってやる企画はおもしろいが、チャレンジが必要。小さいコーナーで実験的に行ったり、体験ものを増やして、企画展以外にも一緒にやれるものを増やせるとよい。
- ・ 今後、昭和や平成の作品が歴史の対象となってくるので、博物館部門と美術部門が絡まる機会は増えるのではないと思う。
- ・ 部門間の統一的なデータベースがなく、これまで連携しにくかった。連携するにはデータベースの構築が必要。
- ・ 部門をまたいで、素材ごとにレスキューができるように、全収蔵品の素材の別がわかる仕組みがあった方がよい。
- ・ 9分野は時代に合わなくなってきたと感じる。分野を作ると、新しくできたジャンルの作品が収集できなくなる。分野を立たせず、博物館部門と美術部門の2本立てだけでよいのではないか。
- ・ ジャンルで機械的に分けるのではなく、コレクションとしての価値を高められるような分類方法はできないか。
- ・ 指定管理のため人の入れ替わりが激しく、ノウハウや人脈等の引継ぎがしにくい。
- ・ 安定的な雇用がほしい。
- ・ 修復作業を通じて、川崎市ゆかりの若手作家との繋がりができたので、コレクションに加えていくなど、今後に活かしていけるとよい。
- ・ 被災資料の修復状況の公開を定期的に行っていくべき。
- ・ デジタルアーカイブ化と公開が必要。
- ・ 市内団体との継続的な事業展開、市民や若手作家との交流イベント、若手作家の支援など。

④ ミュージアムボランティアからのご意見

- ・ 川崎は工業や研究の面をもっと前面に出してもよいのではないか。
- ・ 食など、これからは体験することが重要だと思う。
- ・ 民間とタイアップしたイベントなどをもっと行ってほしい。

（5）その他

⑤ 川崎市総合文化団体連絡会理事からのご意見

- ・ 修復状況について、市民に対してもっと詳細に情報発信してほしい。
- ・ 新たな施設ができて、現在のあり方検討部会のような会議を続けてほしい。
- ・ 中身については、関わってきた学芸員の意見を聴くべき。
- ・ 現在の場所での作業はリスクが高い。より安全な場所で作業して、現状の作品の維持管理してほしい。

1. ヒアリング先・実施日

① 岡本太郎美術館（令和3年1月19日）

市民ミュージアムの今後のあり方について、めざす美術館像や担う役割についてヒアリング

② 民家園・科学館（令和3年1月19日）

市民ミュージアムの今後のあり方について、めざす美術館像や担う役割についてヒアリング

2. 主なご意見

（1）博物館の考え方

■ 基本的な考え方（使命）

- 市民ミュージアムは、市民によって支えられ、高め合える施設であることが望ましい。川崎の歴史、地域を担えるような博物館になると良い。
- 博物館の核となる部分は「市のあゆみ」であり、コンセプトも持って置いた方が良い。歴史を中心に川崎を紹介する場所として新規採用職員研修でも利用してもらい、川崎市の歴史を市職員に学習させるべき。
- 「水と共同体」のテーマは今も生きてるので、そこを今後どうしていくかは考えるべきだが、「多摩川」というキーワードにこだわる必要はないのではないか。

■ 事業の考え方

- 市民ミュージアムは人文系の博物館であり、時代ごとに分かれている展示手法はそのまま継続して良いと思う。
- 近現代史の展示が昭和40年代で止まっており、川崎が公害問題などの困難を乗り越えたその先が展示されていないため、現在まで継続した展示が必要。
- 過去に民家園から市民ミュージアムに移管しきれなかったものがまだ民家園に残っているが、市民ミュージアムは市の中心館であり、逆に市民ミュージアムに移管するべきではないか。

（2）美術館の考え方

■ 基本的な考え方（使命）

- 「現代美術館」と言っても、定義が難しい。岡本太郎美術館は、あくまでも岡本関連の展示が前提であり、それ以外は市民ミュージアムが所管する方が適切だと思う。
- 岡本太郎美術館は岡本作品の延長線上にある作品を取り上げる場所であり、市民ミュージアムは川崎市域全体を意識し、「現代美術館」というよりは「地域美術館」として川崎ゆかりの地域の美術を紹介していく役割を担うべきではないか。
- 岡本太郎美術館は、全国に向けて川崎市にはこんなものがあるんだという紹介の場で、市民ミュージアムは、市民の情報教育の場であるのではないか。
- 市民ミュージアム所蔵の岡本一平や岡本かの子の作品を岡本太郎美術館で引き受けることはよい。
- 集客を考えると、市民ミュージアムに美術館部門はあった方がよい。
- 扱う収蔵品に細かい区分を設けない方がよい。
- 市民ミュージアムの美術館の役割として、たとえば会田誠氏のような川崎市在住のアーティストを取り上げることは外せないが、岡本太郎美術館では会田氏を取り上げる理由がない。また、岡本太郎美術館に取り上げられたくない（岡本太郎のイメージがついたり、つながりがあると思われることを避けたい）アーティストもいるので、現代美術を岡本太郎美術館にまとめるという発想は避けるべき。
- 岡本太郎美術館は施設の構造上、実習生の受け入れができないため、市民ミュージアムに美術館部門はあった方が望ましい。
- 川崎がやるべきことと川崎でなくてもできることの整理が必要。写真や漫画は今も専門のミュージアムがあり、本当に川崎でやる必要があるのかは疑問。

■ 事業の考え方

- 現代美術にこだわらず、古い時代の美術展もありだと思ふ。
- 今までの市民ミュージアムの美術館活動を全く引き継がないことはおかしい。たとえ規模が縮小したとしても、引き継いで継続していくべき。

（3）施設の考え方

- 現施設で浸水対策を万全にして再開館した方がコストは抑えられるのではないかと。
- 常設展示は作りこまない方が良い。展示替えがこまめにできていじれる博物館であるべき。

（4）全体の考え方

- 「都市と人間」というテーマは、現代にもつながる良いテーマだと思う。
- 博物館と美術館の共存は難しい。博物館側からすると現代美術の表現には付き合いきれない。博物館の展示を静かに鑑賞したい来館者を阻害している。（例：作品と連動して展示室を塗装したときの臭気、逍遙空間での演奏による騒音など）
- 被災の経験を活かし、災害や公害の歴史を踏まえ、日本のどこにもないような災害や修復を専門とした美術館を目指すことは考えないのか。
- 被災の経験は前面に出して良いのではないかと。
- 収集委員会は必要。
- 収蔵品台帳は、曖昧なものではなく、庁内でオーソライズを取らなくては行けない。
- 市民ミュージアムの分館を作り、分野で分けること（例：写真館）も考えてはどうか。
- 何があるのか誰にでもわかるような、わかりやすい施設名称の方が良い。
- 展示のデジタルデータ化及び保管は今後課題になってくると思う。コロナ禍において、非接触型の展示のあり方も考えなくてはならない。
- 市民協働は大切だが、大変な側面もある。ボランティアコーディネーターを置くなど、仕組みをこまめにメンテナンスしながら運用していくべきである。
- 商業施設と連携することも考えられるのではないかと。
- 学校などの既存施設の活用も考えてみてはどうか。

（5）その他

- 財団時代は、全く市民目線でなかった。行政にも悪い部分もあり、人的交流がないため、人材育成につながらなかった。現場にどのような人がいるのかが一番大事なので、意識してほしい。
- 学芸員の人材交流（文化室⇔市民ミュージアム⇔岡本太郎美術館）も考えて、市内に複数の美術館はあった方が良い。学芸員の育成は非常に重要。
- 学芸員の人材育成はとても重要で、運営の根幹となる人材を育成できるような環境にするべき。
- 修復した収蔵品は展示しないと修復した意味がない。全国博物館大会でも議題になるくらい全国的にも注目されているので、引き続きしっかりと対応してほしい。
- 今も博物館機能は停止するべきでなく、再開館までのつなぎをどのようにするべきか考える必要がある。出張ミュージアムや他のギャラリーを使用して展示活動を行うなどいろいろな活動ができると思う。
- 展示ができない期間は長期に渡ると思うが、教育普及は断続的に行っていかなければならない。